

レイチェルZが国内盤としては最後のリーダー作である『ラヴ・イズ・ザ・パワー』を発表してから、早いもので5年がたつ。この間、時代は新世紀を迎え、各国から続々と若い才人がジャズ界にデビューしている。世の中の流れがどんどんスピード・アップするにつれ、ミュージシャンが新鮮さを保ち続けることも容易ではない時代に入ったと言えそうだ。そんなレイチェルが、ここに久々の日本発売となるニュー・アルバムを届けてくれた。以前からのファンにとっては待望の新作であり、また今回をきっかけに初めてレイチェルを知るリスナーにはフレッシュな新譜となることだろう。

レイチェルZは本名レイチェル・C・ニコラツソ。1965年12月28日にニューヨーク州マンハッタンで生まれた。父親は画家、母親はオペラ歌手という環境で育ち、早くから音楽的才能を開花。2歳からヴォイス・トレーニングを始め、7歳からクラシック・ピアノをスタート。その後フルートやクラリネットもプレイするなど、音楽を学びながらオペラ歌手を目指した。そんなある時、マイルス・デイヴィスを聴いたことがきっかけでレイチェルはジャズに開眼。父親に連れられて“ヴェレッジ・ヴァンガード”でデクスター・ゴードン、ビル・エヴァンス等のライヴ・パフォーマンスを体験し、ジャズ・ピアノへと傾倒してゆく。ボストンのパークリー音楽大学とニュー・イングランド音楽院では、リッチー・バイラーク、ジョアン・ブラッキーン、トム・マッキンレーに師事。エヴァンス、ウイントン・ケリー、ハービー・ハンコック、チック・コリアらを吸収し、自己のスキルを磨いた。

卒業後プロ・デビューし、学友でもあったサクソ奏者のナジーとのバンドで活動。90年には「トーキー・ブルー」が大ヒットを記録し、ナジーは一躍フュージョン界の人気プレイヤーの地位を獲得している。レイチェルの最初の重要な経歴となったのが、80年代末にステップス・アヘッドのメンバーとなり、90年代半ばまで活動したことだ。マイク・マイニエリに認められ、ドン・グロルニック、イリアーヌ・エライアス、ウォーレン・バーンハートが在籍した当時の代表的なジャズ/フュージョン・グループに加入したのだから、レイチェルにとっては大変なキャリア・アップとなったことは間違いない。またステップス・アヘッドと並行して、ラリー・コリエル、アル・ディメオラ、ジミー・タンネル、ボブ・モーゼス、ミロスラフ・ヴィトウス、アンジェラ・ポフィルとも共演している。

次にレイチェルが出会った重要人物はウェイン・ショーターだ。ショーターにとって7年ぶりの新作となった『ハイ・ライフ』(95年発表)に全面参加。キーボードとオーケストレーションを担当した同作が高い評価を受け、グラミー賞のベスト・コンテンポラリー・ジャズ・アルバムを受賞したことで、レイチェル自身の評価も高めた。またツアー・メンバーとしてもショーターの復活劇に貢献している。99年にはスタンリー・クラークとレニー・ホワイトが中心になって結成された新ユニット“Vertu”(ヴェルトゥ)に参加し、ワールド・ツアーも行った。また2002年にはピーター・ガブリエル・バンドのメンバーとして、北米ツアーに参加している。

ここでこれまでにレイチェルが発表したリーダー作を紹介しておこう。

- TRUST THE UNIVERSE (Columbia) 1992
- ROOM OF ONE'S OWN (NYC) 1996
- LOVE IS THE POWER (GRP) 1998

レイチェルZ

レイチェルZ

<p>First Time Ever I Saw Your Face 愛は面影の中に</p> <p>Rachel Z Trio レイチェルZ・トリオ</p> <p>1. ハート・シェイプド・ボックス Heart - Shaped Box (K. Cobain)(4:54)</p> <p>2. クレストフォールン Crestfallen (B. Corgan)(4:06)</p> <p>3. フラジャイル Fragile (Sting)(6:14)</p> <p>4. イン・ザ・ウィー・スモール・アワーズ In The Wee Small Hours Of The Morning (D. Mann)(4:32)</p> <p>5. 愛は面影の中に First Time Ever I Saw Your Face (E. MacColl)(7:59)</p> <p>6. ハート Hurt (T. Reznor)(6:10)</p> <p>7. タイム・トゥ・セイ・グッドバイ Time To Say Goodbye (Con Te Partiro)(L. Quarantotto , F. Satorii)(4:31)</p> <p>8. 枯葉 Autumn Leaves (J. Kosma)(8:00)</p> <p>9. ドント・ギブ・アップ Don't Give Up (P. Gabriel)(6:45)</p> <hr/> <p>レイチェル Z Rachel Z (piano) ニッキー・パロット Nicki Parrott (bass) ボビー・ラエ Bobbie Rae (drums)</p> <p>録音：2003年4月4、5日 アヴァター・スタジオ、ニューヨーク</p> <p>©© 2003 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p> <p style="text-align:center">★</p> <p>Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan. Recorded at Avatar Studio in New York on April 4, 5 , 2003 . Engineered by Jim Anderson , Technical Coordinator by Derek Kwan. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Front Cover and Artist Photos : John Abbott. Rachel Z Plays Yamaha Piano. Designed by Taz.</p>
--

- | | |
|--|------|
| 4.ON THE MILKY WAY EXPRESS (Tone Center) | 2000 |
| 5.MOON AT THE WINDOW (Tone Center) | 2002 |

1.はマイク・マイニエリがプロデュースを担当。サクソスを迎えた編成で、アコースティック/エレクトリックの両面でレイチェルの魅力を発揮している。2.はビリー・ホリデイ、ヴァージニア・ウルフ、紫式部ら女性アーティストに捧げたオリジナル集。ジョージ・ガソーン、チャーネット・モフェット参加。マリア・シュナイダーの編曲/指揮は見逃せない。3.はエレクトリック・サウンドもふんだんに取り入れたコンテンポラリー作。デビッド・マン、マーク・アントワン参加。トリオによる4.は師でもあるウェイン・ショーターへのトリビュート集。5.は再びトリオによるジョニ・ミッチェル集で、副題は「ピアノ・インプレッションズ・オブ・ジョニ」。ショーターにしるジョニにしる、近年とみにジャズ・ミュージシャンの間でカバー率が上昇しているプレイヤー・コンポーザーであり、レイチェルがアルバム丸ごと“ソングブック”として取り組んだことは大いに注目される。またシングルなトリオ編成でのレコーディングという点でも、ここ数年のレイチェル自身に何か変化が起こっていることも考えられよう。ちなみにレイチェルは8年ほど前、ショーターの案内でカリフォルニアにあるジョニ・ミッチェルの自宅を訪れ、その時に初めてジョニに会ったという。ジョニとショーターはおよそ四半世紀にわたり、ショーターがジョニのアルバムで客演し続けてきた間柄。そんなつながりからレイチェルはジョニに音楽的な触発を受け、アルバムの制作に至ったようである。

さて今回発売される本アルバムは、レイチェルの通算6枚目のリーダー作だ。日本のレコード会社による企画・制作としては初めてのものとなる。本作で3作連続のトリオ・アルバムであり、新世紀に入ってレイチェルが完全にアコースティックへ回帰していることが、このアルバムでも証明されていると言っていい。ベースのニッキー・パロットは、1970年オーストラリア生まれ。4歳からピアノとフルートを始

め、15歳からベースをプレイ。94年ニューヨークに渡り、ルーファス・リードに学んだ。これまでにクラーク・テリー、ビリー・テイラー、マリーナ・ショウ、パトリス・ラッシュェン、パッキー・ビザレリらと共演。現在はレス・ポールのグループでニューヨークのクラブを中心に演奏している。ドラムスのボビー・ラエは残念ながらバイオグラフィーは不詳。前作『ムーン・アット・ザ・ウインドウ』に参加しており、現在はレイチェル・トリオのレギュラー・ドラマーとして活動を続けている。今回の新作の特色として真っ先に挙げなければならないのは、選曲のユニークさだ。ロック系アーティストの楽曲を中心としたセレクションは、過去2枚のショーター特集、ミッチェル特集とはさらに趣を異にし、レイチェルの個人的な趣味嗜好を反映させたコンセプト・アルバム、との印象が強い。「ハート・シェイプド・ボックス」はオルタナティブ・ロック/グランジの人気バンド、ニルヴァーナの93年作『イン・ユエテロ』収録曲。レイチェルの力強いピアノが全編に漲る。ソロの中に「朝日のようにさわやかに」や「ミスター P.C.」を織り込むあたりはレイチェルの遊び心かも。「フラジャイル」はケニー・バロンを始め、近年ジャズメンに人気の高いスティングのナンバー。正攻法のバラードではなく、ラテン・タッチのアップ・テンポが意表を突く。レイチェルのピアノは自由奔放。ドラムスもトリオを鼓舞している。「ドント・ギブ・アップ」はジェネシスを経てソロで活躍するピーター・ガブリエル、86年の代表作『ソー』の収録曲。スロー・テンポで始まり、次第に熱気が高まるにつれ、レイチェルも燃えてくる。ジャズ・トリオとして見事な仕上がりがだ。「愛は面影の中に」は71年にロバータ・フラックがヒットさせたグラミー賞受賞ナンバー。フラック・ヴァージョンよりもテンポ・アップさせ、軽快さを際立たせている。「イン・ザ・ウィー・スモール・アワーズ」はオスカー・ピーターソン、モンティ・アレキサンダー、リッチー・バイラークら多数のピアニストが取り上げているが、レイチェルはこの曲のオリジナル・シンガーであるフランク・シナトラに因んで選曲。アルコ・ベースのイントロに続いてピチカートが主旋律を奏で、テーマが現れるアレンジが秀逸だ。「タイム・トゥ・セイ・グッドバイ」はアンドレア・ボッチェリの歌でヒットし、日本ではサラ・ブライトマンの歌唱で知られるナンバー。どこかヨーロッパのピアノ・トリオの気品が漂っているのは、楽曲のせいだろうか。レイチェルは「飾りのついた四輪馬車」を引用。「枯葉」はピアノ・トリオのカヴァー率が高いスタンダード・ナンバー。それゆえにレイチェルにとっては個性の表現が勝負どころだが、ここではモーダルな雰囲気も醸し出し、女性ピアニストの先入観を打ち砕くプレイを展開している。「クレストフォールン」は90年代を代表するシカゴのオルタナティブ・ロック・バンド、スマッシング・パンプキンズ、98年の『アドア』収録曲。原曲がロックだとは感じさせないくらい、レイチェルは自身のジャズ・ヴァージョンへと再構築した。「ハート」はヘビーなロック・サウンドが支持を集めるナイン・インチ・ネイルズ、94年の出世作『ダウンワード・スパイラル』収録曲。このような“ニュー・スタンダード”を演奏する場合、リーダーのみならずサイドメンの楽曲に対する理解も、出来を左右する重要な要件になる。その意味でレギュラー・トリオで本作に臨んだレイチェルの姿勢は正しい。

2003.7.14 杉田宏樹